

語彙研究の現状と展望

姜晁完*

〈 Abstract 〉

Current Trends and Prospects of Studies on Japanese Lexicology

This paper outlines the results of articles on lexicological research published in the Japanese academic community in Korea for two years from 2017 to 2018. The research trends in each field are summarized into seven categories: word meaning, word form (word composition, word type, social styles), structure of lexicon, lexical survey, and socio-cultural lexicology. In general, research on structure of lexicon centered on synonyms has been active, and research on word meaning and lexical survey has increased, but research on word composition, word type, and social styles has decreased compared to the past two years. A study on the change of meanings of synonyms and onomatopoeia, a socio-cultural study on the lexicology that forms social values through vocabulary and media reflecting culture, and the corpus lexicology researches which are the method of collocation extraction, the application of multimedia corpus to Japanese education were booming.

In the later Korean vocabulary research, there is a study on vocabulary research as well as recent history linguistic vocabulary research, sociolinguistic vocabulary research, comparative linguistic vocabulary study, and corpus vocabulary research as well as Saito and Ishii (2011). It is hoped that cross-disciplinary studies such as dialectology, philology, folklore, feminism, information science, and psychology are expected.

Field : Lexicology

Keywords : Word meaning, Structure of lexicon, Lexical survey, Socio-cultural lexicology, Corpus lexicology

1. はじめに

本稿では、2017年～2018年の2年間に韓国の日本語学界で公表された語彙研究に関する論文127編を取り上げ、その成果を概観する。集められた論文を語彙的カテゴリーに従って、意味(語義)・語形・語構成・語種・位相・語彙体系・語彙調査の7つの分野に分けたが、各分野の論文の数には差があり、便宜的に、(1)語義、(2)語形・語構成・語種・位相、(3)語彙体系、(4)語彙調査の4つにまとめ直した。また、語彙的カテゴリーではないが、論文の数が多かった語彙研究の方法論・観点として、(5)通時的な語彙研究、(6)社会的な語彙研究、(7)コーパス語彙研究という分類項目も立てた。

張元哉(2017)によると、2015年～2016年の語彙研究の分野別の傾向は、語構成・命名と類義語・多義語の論文がもっとも多く、その次が語種・位相であった。それに比べると、今期も類義語を中心とした語彙体系の研究は盛んであったが、語構成・語種・位相の研究は少なくなり、語義・語彙調査の研究が増えてきたという傾向がある。語構成の場合、全体的な数は少なくなったものの複合動詞をテーマとし

* 大邱カトリック大学校 助教授、日本語学

た論文が多いという傾向は変わっていない。個別単語の歴史を辿った語誌、類義語の意味変化、オノマトペの意味変化や収容過程を中心とした通時的な語彙研究、文化を反映するものとしての語彙、メディアを経由して社会のものの見方を作り上げるものとしての語彙という立場からの社会・文化的な語彙研究、従来の類義語の使い分けだけでなく、コロケーション抽出の方法やマルチメディアコーパスの日本語教育への応用など多様なテーマのコーパス語彙研究が活況を呈したのも今期の語彙研究の特徴と言える。

前述の通り6つの分野に分類しているが、複数の分野にまたがるもの、一つの語彙的カテゴリーにとどまらず多面的・複合的に記述・分析しようとするものが多く、便宜的な分類にすぎない。以下、今期の研究の動向を代表的な論考を中心に述べる。

2. 意味(語義)

意味(単語が一般的に表す世界の部分としてのものや観念)は、単語の最も基本的な語彙的性質であり、一つ一つの単語がどのような意味をもっているかを明らかにすることは、語彙研究にとって最も基本的で重要な課題である。今期の単語の意味・語義の研究はいくつかの傾向が見られた。

まず、類似した意味領域の日本語と韓国語の単語をとりあげ、両単語間の意味・用法の違いや使い分けを論じたものが目立つ。李忠奎「切断動詞「切る」と「자르다」の対照研究」(『日語日文學』77、2018)は、切断動詞「切る」と「자르다」を対照言語学の観点から考察し、単純動詞として用いられる場合のみならず、動詞結合や慣用句として用いられる場合においても「자르다」より「切る」の方が意味・用法が細分化されていることを明示した。長原成功「「夜」と「밤(bam)」に關する一考察」(『日本近代学研究』57、2017)は、新聞における「夜X時」と「밤X시」における時間的範囲の統計と400名に対するアンケート調査を行い、「夜」と「밤(Bam)」における時間認識に差があるのかを考察している。また、金到閤「日・韓 両国語 動詞의 多義的인 語彙分析研究—遊ぶ와 놀다를 中心으로—」(『日本文化學報』78、2018)は、「遊ぶ」と「놀다」の多義的語彙の意味変化に対して、自動詞と他動詞との意味関係、ガ格ならびにヲ格・ニ格名詞と動詞との意味関係を区別して分析したものである。조은정, 윤강구「「でる」と「나가다」의 의미에 대한 대조연구」(『日本語教育』79、2017)は、「でる」の「나가다」に対応するイメージスキーマはプロトタイプにもっとも忠実であるのに対して、「나오다」だけに対応するイメージスキーマは受け手(到達点)の焦点が私に向けられていること、「でる」が「나가다・나오다」両方に対応する場合は話者の視点による意味の違いであることを明らかにした。劉恩聖「한·일 척도형용사의 대조연구—「 많다(多い)」와「깊다(深い)」를 중심으로—」(『日本語教育研究』43、2018)は、程度の大きさを表す尺度形容詞「많다」と「깊다」、「多い」と「深い」を中心に他の尺度形容詞との類義関係と日韓対応関係を考察しており、한증덕·김인현「「ところ」の意味・用法について」(『日本語教育』81、2017)は、對譯文の用例から典型的な使用形式ごとに「ところ」に対応する韓国語の単語を対照分析している。

次に、認知意味論の立場から単語内部の意味拡張やプロトタイプについての論考が多い。金秀珍「「たつ」の意味分析と意味拡張の様相」(『日語日文學』78、2018)は、日本語の動詞「たつ」の複数の意味と意味拡張の様相を認知意味論の観点から分析した。이우제「일본어 타격동사「うつ」의 의미 확장에 관한 일고찰」(『日語日文學研究』、102-1、2017)は、「行為概念」と「行為構成要素」を想定し、《主体が対象になにかで衝撃を与える》という基本意味からどのような原理で意味が拡張するのかという

観点から「うつ」の認知意味論的な分析を試みた。金祉諤「韓國人日本語學習者の動詞の意味のプロトタイプの考察—「伝える」「投げる」「忘れる」の場合—」(『日本語教育』79、2017)は、学習者の意味のプロトタイプは何なのか、そのプロトタイプは習熟と共にどのように変容するか、その変容に影響を及ぼす要因は何なのかという3つの観点から動詞の意味的なプロトタイプを分析している。また、全紫蓮「副詞「別に」の意味変化と主観化」(『日本言語文化』39、2017)は、副詞「別に」の多義的な意味機能を詳細に記述し、それらの間に見られる意味変化の過程を「主観化」の観点から考察したものである。

一方、慣用句の意味についての研究も多い。백이연「『기/氣』 관련 관용구의 한일 대조연구」(『日語日文學研究』106-1、2018)は、辞書とコーパスの実例から「氣」関連の慣用句を収集し、漢字語彙と「氣+助詞+述語」の慣用句を中心に日韓の違いを分析した。김현수「한국어「보다」와 일본어「見る」가 포함된 慣用句 의미형성의 양상 고찰」(『日語日文學』76、2017)は、視覚と関連した慣用句の中で韓国語「보다」と日本語「見る」が含まれた慣用句を研究対象にそれぞれの意味形成にどんなメカニズムが関係しているのかを考察した。김계연「한·일 섭취동사 관용표현 대조고찰—섭식동사의 의미역할을 중심으로—」(『日語日文學研究』104-1、2018)は、日・韓両語の摂食動詞慣用表現を取り上げ、慣用表現の意味の特徴、及び摂食動詞の意味上の役割を対照考察している。また、森本勝彦「韓国語と日本語の四肢に関連する慣用句の対照研究」(『日本文化研究』66、2018)などに見られるように、手・足・腕などの四肢と関連した語彙が含まれた慣用句に限定して認知的観点から隠喩と換喩を分析した日韓対照研究や人知的観点からの研究が目立つ。

その他に、김양선「회화체에서의 일본어 이디엄(idiom) 특성—일본만화를 중심으로—」(『日本語學研究』55、2018)は、会話体に使われるイディオムはどんな特性をもっているか、従来の学習書に登場した日本語のイディオムは日常会話においてどれほど役に立つのかなどの疑問をとりあげ、한탁철「한·일 동물속담 대조연구—여우를 소재로 한 속담을 중심으로—」(『日本文化學報』74、2018)は、狐を素材とした韓日両国のことわざを六つに分類して対照分析を行っている。また、薛根洙「移動動詞の研究—連語と慣用句との関係を中心に—」(『日語日文學研究』100-1、2017)は、移動動詞が連語や慣用句を構築する場合、その意味・用法にどんな特徴があるのかを考察したものである。

3. 語形・語構成・語種・位相

語形の研究は数は少ないが、略語とオノマトペに大別される。略語について、金廷珉「ドラマタイトルの短縮語に関する韓日対照研究」(『日本語學研究』56、2018)は、日本語と韓国語のドラマタイトルにおける短縮語の形成パターンと頻度を調査し、両国語の違いを明らかにした。崔主利「略語の様相—国語辞典を中心に—」(『日語日文學研究』102-1、2017)は、『新明解国語辞典』の見出し語のうち、「略」、あるいは「省略表現」と定義されている用例を略語と認め、一般的に定義されている略語の様相について、省略された単位が単語の場合と単語以上の場合に分類して考察している。

一方、オノマトペの研究は、日本語と韓国語のかたさややわらかさを表す擬態語の多義的意味構造と方向性について論じた、澤田信恵「日本語・韓国語のかたさの擬態語における多義性の考察」(『東北亜文化研究』54、2018)、同「日本語と韓国語のやわらかさを表す擬態語における多義性」(同56、2018)、オノマトペの音韻的特徴についての語感分析を行い、韓国語日本語学習者がもっている日本語オノマト

べの特徴と習得方法などを考察した、김영란「한국인 일본어 학습자의 어감분석을 통한 일본어 오노마토펬의 특징」(『日本文化研究』67, 2018)などが挙げられる。

次に語構成について見ていこう。語構成を研究するためには、どのような要素がどのような合成語をつくっているかを調べる必要がある。今期の語構成の研究は複合動詞についての研究が多かった。金光成「量の副詞と共に起する日本語複合動詞の特性に関する考察」(『日語日文學』78, 2018)は、複合動詞が實際用いられている文脈の特性に注目し、共に起する量の副詞の意味的特性に焦点を当てて認知意味論の観点から複合動詞の多様な用法を分析した。同「複合動詞「名詞+づける」の語形成とその動機づけ—名詞部分が抽象的關係に属するケースを中心に—」(『日本語教育』85, 2018)は、複合動詞「名詞+づける」の使用の実態を現代日本語書き言葉均衡コーパスや分類語彙表を用いて検討している。白鍾讚「日本語の複合動詞「見〜」の考察」(『日語日文學研究』103-1, 2018)は、日本語動詞「見る」が複合動詞の前項動詞として使われる場合、後項動詞の特徴と複合動詞の意味がどのように変るかを考察したものである。派生語の接辞については、日本語と韓国語においてもっとも類似性が高いと言われる接尾辞「〜的」の使用実体をコーパスから詳しく調べ、日本語の「〜的」が多様な表記と形態に活用されること、またそれに合わせた効率的な学習方法を提案した、박선주「코퍼스를 이용한 일본어 어휘학습의 제안—「〜的」가 붙는 어기의 요소를 중심으로—」(『日本語教育』85, 2018)があった。また、허황희「日本の 라면名」(『日本近代学研究所』55, 2017)は日本ラーメンの名称を大量に調査し、「ブランド名+材料の種類+地名(人名)」という語構成パターンを抽出した。

語種が単語の語彙的性質としてどのように働いているかを明らかにすることも、語彙研究の重要な課題であるが、語種についての研究は、日韓比較の論考が多い。장원재「어휘등급에 의한 한일 차용어 분류에 대한 유효성 검토」(『日本語文学』81, 2018)は、日韓の借用語を対象に語彙レベルを基準としてそのレベルが類似したグループと2つ以上のレベルが異なるグループへの分類を試み、その有効性を検討したものである。신민철「韓國語와 日本語의 漢字語 比較研究—調査結果에 대한 考察—」(『日本近代学研究所』55, 2017)、同「韓國語와 日本語의 一字 漢字語에 관한 考察」(『日本近代学研究所』59, 2018)は、言語全体を視野にいた漢語の比較研究で、日韓の国語辞典から漢語の構成と比率、意味領域の類似点、相違点を比べている。朴善玉「『平家物語』における混種語の語種構成と構成要素の考察」(『日本文化研究』68, 2018)は、『平家物語』に用いられた混種語について語種構成の形式と構成要素の特徴、現存する混種語の比率を調査した。また、社会的な観点からの語種研究も見られる。이덕배「70・80대 한국인의 일본식 한자어 사용실태 및 인식」(『日本語教育』83, 2018)、이덕배・안동미「50-60대 한국인의 일본식 한자어 사용실태 및 인식에 관한 고찰」(『日本語教育』79, 2017)などは、韓国語に残存する日本式漢字語の流入時期と変化の様相に注目し、戦後世代の50代~60代の韓国人の日本式漢字語に対する使用実体、認識および日本語式表現の認知度、使用意識を調べたものである。

最後に位相の研究であるが、単語の使い方の違いを産み出す側面を扱う位相の研究は少なかった。白同善「日本語における卑罵語の使用実態に関する研究」(『日本文化研究』63, 2017)は、「アホ」と「バカ」を例に日本語の卑罵語の使用分布と実態、意味について観察した。최정희「한국 대학생의 '간지나다' 사용양상에 관한 사회언어학적 고찰」(『日本語教育』83, 2018)は、2003年、インターネット新聞に登場して以来、現在まで使われている日本式新語「간지나다」の使用実体と形態的・意味的变化を調べ、意味的系列の中で戦略的に選択され、新しい概念を表すという新語のメカニズムを論じている。

4. 語彙体系

単語は、一つ一つが孤立して存在するのではなく、一定の「まとまり」を形づくっている。そうしたまとまりの基礎にあるのが、二つの単語がその語彙的な性質に基づいて構成する関係であり、もっとも複雑な関係は意味的な関係である。二単語間の類義関係についての研究は、「習う」と「学ぶ」の学習動詞、「育てる」と「養う」の養育動詞を対象に、その意味用法と置き換え関係について考察した、権奇洙「日本語における学習動詞の一考察―「習う」と「学ぶ」を中心として―」（『東北亜文化研究』50、2017）、同「日本語における養育動詞の一考察―「育てる」と「養う」を中心として―」（同52、2017）、「悩む」と「苦しむ」の前に格助詞「に」「を」「で」が接続する形式に注目し、両単語の意味的關係を分析した、坂野慎治「悩む・苦しむ」に前接する格助詞の用例分析―名詞句と格助詞「ニ・デ・ヲ」との關係を中心に―」（『比較日本學』39、2017）、「あく」「あける」における語彙の意味と自他対応の相関關係を考察し、語彙的意味の拡張によって影響される自他対応の多様な様相を論じた、朴惠晟「有対動詞「あく」「あける」の自他対応と非対応」（『日本学研究』54、2018）、「聞かれる」と「言われる」の置き換えのルールを構文上のプロトタイプと文脈の状況という2つの要因から説明した、安善柱「「聞かれる」の意味・用法について―「言われる」との關わりをめぐる―」（『日本研究』27、2018）などがある。

一方、日本語内部の二単語間の意味的關係を韓国語の意味領域の重なる類義語と比較・対照した研究が多数見られる。유은성「한·일 적도형용사의 대조연구―「많다(多い)」와「깊다(深い)」를 중심으로―」（『日本語教育研究』43、2018）は、韓国語「많다」「깊다」と日本語「多い」「深い」を中心に他の尺度形容詞との類義關係や日韓対応關係を分析した。金慶惠「日本語と韓国語の動詞の対照研究―日本語教育の観点から「あける」「ひらく」と「열다(jo:lida)」「피다(p'joda)」の意義素の抽出を目指して―」（『日本語教育研究』44、2018）は、韓国語学習者が「あける」と「ひらく」を使い分ける際の誤用をなくするという観点から、対応する韓国語の「열다」と「피다」との対照分析からそれぞれの動詞の対象を明らかにした。中坂富美子「程度副詞の類義語に関する韓日対照研究―「가장」「제일」と「最も」「一番」を中心に―」（『日本語教育』81、2017）は、使用ジャンルと文体・被修飾語の3つの観点から「가장」「제일」と「最も」「一番」の使い分けを論じたものである。

さらに、三つ以上の単語間の意味關係や特定の語彙における意味關係の様子を描こうとした研究がある。崔鍾勳「準備」「用意」「支度」の意味特徴の重なりとずれについて―「준비」との対照を通して―」（『日本語學研究』54、2017）は、類義關係にある「準備」「用意」「支度」をとりあげ、意味特徴の違いや韓国語の「준비」と違いを対照的に分析する。金英兒「日韓両国語の聴覚形容詞の研究―類義語における語彙教育の立場から―」（『東北亜文化研究』52、2017）は、類義語「うるさい」「やかましい」「騒がしい」とそれに対応する韓国語の聴覚形容詞「시끄럽다」「요란하다」「떠들썩하다」の意味・用法を比較、対照している。Asano-Cavagh, Yuko「NSM Approachによる類義語の意味分析―日韓の伝達表現を中心に―」（『日本語學研究』54、2017）は、日本語の伝達表現「そうだ、らしい、って」と韓国語の伝達表現「-대、-니까」をNSM(Natural Semantic Meta language

の観点から分析した。また、小野里恵「日韓の類語表現とその連語」（『日語日文學』77、2018）は、日常でよく見かける類語10種類を選定、その10種類がどういった表現と結びつくのか、韓国語ではどのように表現されるのかを分析。申惠淑「動物語彙を用いた日本語感情表現研究―韓国語表現との対照を含めて―」（『日語日文學研究』104-1、2018）は、日本語の感情表現に表れた動物語彙の表現傾向や特徴を

韓国語と比較して調べたものであり、홍민표「형제자매 호칭에 대한 한일 대조연구」(『比較日本學』42, 2018)は、日韓の首都圏に居住する既婚男女585名を調査対象に兄弟姉妹の呼称についての実体を社会言語学的観点から対照、考察したものである。

単語間の意味関係の一つ一つを広げていくことによって、より大きな意味の体系、最終的には、一言語の語彙全体の体系を明らかにすることも期待される。マクロな体系についての研究は、日韓辞典に記述された意味項目に基づいて韓国語の色彩語彙の意味情報を体系的に構築しようとした、고은숙「한일사전의 색채형용사 의미 정보 구축에 관한 연구」(『日本研究』72, 2017)があった。最近はコンピュータの発達によって、より大規模でより詳細な意味関係を表示できるシソーラスがつくられるようになってきたが、今後、電子シソーラスを積極的に利用した研究が期待される。

5. 語彙調査

実際に使用された語彙に見られる統計的な性質を明らかにしようとする計量語彙論の語彙調査(実際の文章・談話においてどのような単語がどれほど使われているかを大規模に調べる単語の頻度調査)では、今期、2つの傾向が見られた。

まず、国語教科書の語彙調査、特に韓国と日本の国語教科書の対照比較研究が盛に行われた。宋正植「韓・日小学校4年生国語教科書の語彙研究」(『日本言語文化』43, 2018)は、韓国と日本の小学校4年生国語教科書の語彙調査を実施し、有意差が生じた品詞項目をもとに品詞別使用頻度の上位語に焦点を絞り、その類似点と相違点を明らかにした。李美淑「한국과 일본의 중·고등학교 학교 급별 국어교과서 어휘 변화 연구」(『日本學報』116, 2018)は、韓国と日本の中学校(中1)と高校(高1)国語教科書のテキストに使われた語彙の意味分野別分布の変化を分析すると同時に段階別語彙使用が適切であるかを検証した。また、김용민「한·일 초등사회 교과서 경제관련 개념의 사용빈도 분석」(『日本文化研究』62, 2017)は、韓国と日本の小学校教科書に使われた経済用語の語彙の使用傾向を比較したものである。国語教科書の語彙調査は、語彙論を越え、言語政策や日本語教育における教育基本語彙選定と単語指導の問題、社会的価値観の形成過程の究明という社会学研究につながるという点でも意義深い。

一方、吳秀文「新聞3社の社説語彙の使用頻度-多用される名詞語彙の分類」(『日語日文學』79, 2018)は、新聞の名詞語彙を分析し、外国人日本語学習者が学習すべき新聞3社の述べ語数80%に相当する異なり語数を合わせた1,212個の名詞基本語彙を提示している。김선영「일본인터넷신문 어휘 분석」(『日本語文学』81, 2018)は、日本のインターネット新聞におけるビジネス記事を対象にして、品詞別・語種別の使用様相を中心に語彙分析を行った。また、김하연「일본어 의료어휘 연구」(『日本語文学』81, 2018)は、医療観光客に接する医療従事者が現場で円滑な意思疎通をするための主要語彙を提示したものであり、이윤정「3차원 컴퓨터지원 설계프로그램의 어휘 분석 연구」(『日本文化學報』77, 2018)は、自動車設計講座の教科書『自動車CAD基礎講座テキスト』から国内の機械・自動車エンジニア養成課程や関連業務で効率性を高められる基本語彙なるものを抽出したものである。これらの特定分野の文章を対象とした語彙調査は、日本就職を目指している理工系・技術系の大学生や研修生の日本現地での言語生活をサポートするという実用的な目的の研究であり、最近の海外就職の流行を反映していると言える。

また、韓国で18世紀末に刊行された日本語語彙集『倭語類解』と17世紀の日本語学習書『捷解新語』

改修本の収録語彙を比較し、『倭語類解』の語彙集としての性格と意義を分析した、호규진 「왜어유해 어휘의 성격—접해신어 개수본과의 비교를 중심으로—」(『日本學報』112, 2017)、母語話者と日本語学習者が同じ主題で作成した意見文を比較し、学習者の語彙使用の傾向から難易度の高い単語とナ形容詞を優先的に学習させる必要性を主張した、김시은 「한국인 일본어 상급학습자의 의견문 사용어휘 연구—모어화자와 품사 비교를 중심으로—」(『日本語教育研究』41, 2017)などの語彙調査もある。

日本語の場合、分ち書きをしていないため単語の区切りを自動的に見つけることが難しく、また、漢字や仮名を混せて使う複雑な表記システムのために同じ単語か異なる単語かの判別も簡単ではないという理由で、英語などに比べると大規模な語彙調査が難しいという事情があった。しかし、最近では、そうした単位切りや同語異語判別をかなりの精度で自動的に行うコンピュータ・プログラムが開発され、また、調査の資料となる大規模なコーパスも用意されるようになり、個人がパソコンを使って本格的な語彙調査を行うことも可能になってきた。すべてコンピュータで、というわけにはいかないことは言うまでもないが、今後は、より大規模な調査によって、語彙の統計的な性質がさらに明らかになっていくことが期待される。

6. 通時的な語彙研究

語彙研究にはいろいろなやり方が可能である。例えば、単語の意味をはじめとする語彙的なカテゴリーの歴史的な変化を調べてみたり、地域による違いを調べてみたり、外国語と比べてみたり、人間や社会・文化とのかかわりを考えてみたりすることができる。今期は、語彙の通時的な変化や社会・文化との関わりを探ろうとした研究が目立っている。

通時的な語彙研究においては、まず、個別的な単語の起源や意味・用法の変遷などを詳細に記述する語誌の研究が目立つ。林褪映 「副詞「所詮」の史的変遷」(『日語日文學研究』101-1, 2017)は、梵語を語源とする単語「所詮」が「しょせん」で発音される場合に否定的な意味が発生するという点に注目し、副詞「所詮」の成立過程と意味変化の諸相を分析した。박효경 「近代語「浪漫」の成立と変遷」(『日本言語文化』41, 2017)は、近代語「浪漫」の変遷について、「romanticism」と「romantic」の形での輸入、「浪漫主義」「浪漫的」という当て字での拡散、「ロマン」と「浪漫」の独立、のような通時的な過程を明らかにした。また、石塚令子 「「車(クルマ)」の語誌」(『日本言語文化』40, 2017)は、日本語「クルマ」の語誌について、その意味の成立と変化の過程を韓国語「구르마」と比較、分析したものである。

次に、類義語の通時的な意味変化についての研究も多い。中世のキリシタン文献『天草平家物語』『天草イソボ物語』『狂言』などに表れた「懐かし」「恋し」「思ふ」などの感情語彙の類義語の語義変化を通時的に考察した、이영숙 「語義変化와 類義語의 고찰—中世 기리시탄 資料의 「懐かし」「恋し」「思ふ」를 중심으로—」(『日本学研究』51, 2017)、韓国語の「나」・日本語の「わたし」・英語の「I」を取り出して通時的な変遷上の特徴を対照分析し、それぞれの相違点や共通点などを明確にしようとした민승희 「1인칭대명사 「나」, 「わたし」, 「I」에 관한 통시적 관점에서의 대조 분석」(『日語日文學研究』105-1, 2018)などが挙げられる。

また、オノマトペの意味変化や日本語への収容過程についての論考がある。竹下知佳・崔建植 「ハラ～ホロ系反復形オノマトペの意味変化について(Ⅱ)—近世語～現代語における形態・意味用法の変化を中心に—」(『東北亜文化研究』54, 2018)は、現代語におけるハラ～ホロ系オノマトペの意味の棲み分け

が近世に始まり、近代には清濁交替のニュアンスの差もほぼ成立して現代に至った、形態・意味用法の変化を明らかにしている。현영미・이경규「고전 중국어 오노마토펬의 일본어 수용에 관한 연구—명치기 문헌에 나타난 접어형태의 용례를 중심으로—」(『日本近代学研究』77、2017)は、明治期の文学作品に表れた置語形式のオノマトペが文章のなかでどんな役割をしているか、また、中国や日本の古典文献を収録した大辞典類を資料として、オノマトペの収録過程で意味用法に変化を見せたものを分析している。

その他、大蔵流狂言3種を中心に語構成要素と慣用句に使われる1字漢語「気(キ・ケ)」の変遷について分析した、劉相溶「語構成要素로서 1字漢語 「気(キ・ケ)」의 變遷—大蔵流狂言 3種의 名詞用例를 中心으로—」(『日本学研究』55、2018)、「三鞭酒」というシャンペン音訳語が中国語から日本語、日本語から韓国語へと受け入れられる中で、その概念にどのような変化があったのかを漢字およびハングルの表記との関連性から捉えた이자호「한·중·일의 근대 어휘 교류에 관한 연구—삼페인의 표기와 개념—」(『日本語學研究』52、2017)などの研究がある。

7. 社会文化的な語彙研究

一方、社会・文化を反映するものとしての語彙研究も盛んに行われた。伊藤貴雄「「オタク川柳」に見る語彙表現と心」(『日本研究』27、2017)は、前後の文脈を知らずとも読み解くことが可能なオタク川柳を分析対象として、オタク文化の表出としての語彙表現とそこから浮かび上がる彼らの心象風景の一断面を分析した。同「大阪弁川柳」に見る語彙表現と心象風景の一断面」(『日本研究』29、2018)は、「方言」「語彙」「主題」という観点から大阪弁川柳に表れた心象風景の一端を観察した。また、천호재「언어(連語)에 기반한 연가(演歌) 가사 분석」(『日本語文学』82、2018)は、日本文化が反映された演歌の歌詞に注目し、そこに現れた喜怒哀楽の感情を連語単位で考察している。大谷鉄平「Edward Sapirの意味研究に関する一考察 : 「心理」「感覚」「文化」の連関性を中心に」(『日本文化學報』72、2017)は、言語論に限らない複眼的視座より、サピアの言語論、特に意味研究での特質を整理すると共に日常的な言語現象に対する援用可能性を確認したものである。

しかし、語彙というものは、単に社会・文化を反映する受動的な存在ではない。社会・文化的なものの見方というのは言語の使用によって意図的に形成され得るものであり、特にメディアによって繰り返され、広められる語彙の固定的な使用パターンは社会・文化的なものの見方を作り上げていく重要な要因となる。김유영「일본 미디어의 동일본대지진 원자력발전소 사고관련 어휘선정 및 구사에 관한 연구—후쿠시마와 타국의 원자력발전소 사고기사의 보도태도에 대한 비교대조를 중심으로—」(『日本近代学研究』55、2017)は、福島原発事故に対する新聞の態度を考察し、報道記事に用いられる語彙と表現の選定と使用傾向について、スリマイル島・チェルノビル記事と比較・対照分析している。大谷鉄平「評価語彙の流通と「場」の影響」(『日本文化學報』77、2018)は、web掲示板に投稿された「ラーメン店に対するロコミ」を量的に調査し、本来、評価語彙に属さない単語を含む複数の語彙範疇にある単語が特定のメディア上で出現する際、閲覧者から評価語彙として認識される実態、ならびにその評価項目のバリエーションを記述的に描写した。大谷鉄平「流行語「萌え」の意味拡張と「理屈づけ」—雑誌記事タイトルの用例分析をもとに—」(『日本語文學』75、2017)は、雑誌の記事タイトルに出現した流行語「萌え」の語義の意味拡張における外的要因の影響性、特に流行語の普及・定着とメディアの影響について検討した。また、윤민이「한·일 양국 신문 어휘의 젠더적 사용양상」(『日語日文學研究』106-1、2018)は、韓・日

の新聞の社会面の記事に使われた人間を表す語彙が指している対象のジェンダー的な特徴を比較考察したものである。

その他の社会・文化的な語彙研究として、唯一神思想と翻訳語「神」が近代日本の宗教的な地形図のなかでどのように定着されていったかを分析した、김성은「기독교의 유일신 사상과 번역어 “神”」(『日本語文学』74、2017)、韓国と日本のお互いの認識を解明しようとする研究の一環として、日本人が韓国や韓国語について持ついいイメージと悪いイメージを自国のイメージと比較分析した、関崎博紀「日本人が抱く韓国の国、人、言葉に対するイメージ—日本の国、人、言葉に対するイメージとの比較を通して—」(『日本語学研究』54、2017)、在日韓国人の「-スル」と「-하다」形式を慣習的な単語、非慣習的な単語、混用と3分類した上、各単語の使用分布を音声コーパスから調査した、손영식「재일한국인 이중 언어 사용자들의 「-스ル」 「-하다」 사용실태 연구—음성 코퍼스를 자료로—」(『日本学報』115、2018)、文化要素の抽出システム(CEMS)を使って、ride_vehicleフレームに属する日本語の「のる」と韓国語の'tada'のそれぞれの文化要素を取り出して両言語の特徴的な意味拡張方向を考察した、이준서「ride_vehicle'프레임의 의미 확장에 관한 일고찰」(『日語日文学研究』103-1、2017)などが挙げられる。

8. コーパス語彙研究

前章で単語の通時的な変化や社会・文化との関わりという観点で語彙研究を内容の面で豊富にしてくれることを確認した。一方、方法論的には、最近、コンピュータを使って語彙の使用実態を大規模に調べる研究が注目されつつある。例えば、単語の意味を詳しく知るためには、その単語がどのような単語と結びついて、どのような単語とは結びつかないか、ということを調べてみる必要がある。個々の単語の結合の可能性は、内省で考えるだけでは不十分で、実際の使用例をたくさん集めて調べなければならないのだが、最近では、コンピュータを使って数多くの用例を簡単に集めることができるようになった。特に、2012年、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)の整備以来、語彙研究において、コーパスが積極的に取り入れられるようになった。

コーパスが得意とする語彙研究の分野は意味論、特に使用実体から統計的かつ帰納的に使い分けのルールを明らかにする類義語の記述であろう。今期もこの種の研究が多い。姜旻完「コーパスを用いた語法研究の一例—「特徴」「特色」の比較—」(『日本言語文化』41、2017)、同「어법분석을 통한 유의어 기술의 예—「改善」과「改良」의 경우—」(『日本語教育』84、2018)は、語法分析に基づいた類義語記述の方法を採用し、頻度・場面(文体)・共起語の意味的傾向という3つの要因から類義語の使い分けを記述している。공미희, 손동주「코퍼스를 이용한 『にくい』『づらい』『がたい』에 관한 의미 분석」(『日本語文学』79、2017)は、「~にくい」「~づらい」「~がたい」が実際どのように使われているのか、特に前に接続する動詞の種類をBCCWJから調査・分析し、それぞれの意味的な特徴について考察している。李東哲「ことばの変化と用法に関する一考察—「知れる」の使われ方と意味を中心に—」(『日語日文学研究』、2017)は、コーパスを使って、〈知れる〉の多様な用法を整理し、なぜ「知れる」が「知られる」を代替するのかについての原因を明らかにした。また、신은혜「「さて」と「ところで」의 의미적 기능 차이에 대하여—BCCWJ와 CSJ에 의한 분석 예—」(『日本近代学研究』59、2018)は、話題転換を表す接続詞「さて」と「ところで」の違いについて、頻度・使用テキスト・後文の性格という3つの観点から統計言語学的に分析したものであり、劉恩聖「한·일 감정형용사의 대조연구—「기쁘다」와「ウレシイ」

를 중심으로」(『日語日文學研究』101-1、2017)は、コーパスから抽出した使用例から「기쁘다」と「うれ시イ」の意味用法の特徴、類義関係を含めた両形式の対応関係を考察したものである。

一方、コーパス語彙研究における方法論を論じた研究も見られる。単語のコロケーションを抽出するにあたって、様々な統計的方法の中でもっとも適切なモデルを提示しようとした、박중승「코퍼스에 의한 일본어 이은말 연구」(『日本語文学』77、2017)、異なる2つの統計指標を用いて授受動詞の特徴的なコロケーションと汎用的なコロケーションの語彙リストをそれぞれ作成し、3つの授受動詞の補助動詞用法の異同を明らかにした李惠正「日本語授受表現における動詞コロケーションの意味類型について—大規模コーパスを用いて—」(『日本語教育』81、2017)、また、人を表す名詞の概念的意味と社会文化的意味の関係を中心に、コーパスを利用した類義語の記述の方法について論じた、강경완「코퍼스를 이용한 유의어기술의 방법에 관한 연구—人名詞의 사회문화적 의미 분석을 중심으로—」(『日本言語文化』38、2017)などの研究がある。

また、コーパスを使った語形成の研究や日本語教育への応用研究もあった。金光成「複合名詞の語形成に見られるメタファーと再分析」(『日本文化研究』67、2018)は、『国語研日本語ウェブコーパス』を使って複合名詞「名詞+倒れ」の使用実体とその語形成の成り立ちについて実証的に分析している。一方、손영석「초・중급 일본어 학습자를 위한 멀티미디어 코퍼스의 교육적 활용방안 연구—일본어 자막 탑재를 중심으로—」(『日本語教育』82、2017)、同「한국어 자막과 멀티미디어 코퍼스를 활용한 일본어교육 방안」(同83、2018)などは、従来の研究用「対談放送MMC」の文字化テキストに読み仮名やハングル情報を付与して日本語と韓国語の字幕を製作し、学習者に映像と字幕を同時に提供することによってコーパスの教育的な活用度を高められることを、「かもしれない」「真剣だ」などの語彙や文法表現を対象とした教室活動の実験観察から実証的に論じた。マルチメディアコーパスの日本語教育への活用方法について、具体的に提案した興味深い論考と言えよう。

9. おわりに

本稿では、2017年～2018年の2年間に韓国の日本語学界で公表された語彙研究に関する論文を取り上げ、その成果を概観した。語義、語形(語構成・語種・位相)、語彙体系、語彙調査、通時的な語彙研究、社会文化的な語彙研究、コーパス語彙研究の7つのカテゴリーに分け、各分野における研究動向をまとめてみた。全体的に類義語を中心とした語彙体系の研究が盛んであり、語義と語彙調査の研究も増えてきたが語構成・語種・位相についての研究は前期に比べて少なくなっていた。語誌、類義語やオノマトペの意味変化についての通時的な研究、文化を反映する語彙・メディアを経由して社会のものの見方を形成する語彙の姿についての社会・文化的な研究、類義語の使い分け・コロケーション抽出の方法やマルチメディアコーパスの日本語教育への応用などのコーパス語彙研究が活況を呈したのが今期の語彙研究の特徴であった。

最近活発になりつつある歴史言語学的な語彙研究、社会言語学的な語彙研究、対照言語学的な語彙研究、コーパス語彙研究だけでなく、これからの韓国における語彙研究には、斎藤・石井(2011)にまとめられているように、語彙研究を専門とする語彙論を越え、方言学、文献学、民俗学、フェミニズム、情報学、心理学など、実に様々な学問を横断して行われることを期待する。

【参考文献】

- 강경완(2017) 「코퍼스를 이용한 유의어기술의 방법에 관한 연구—人名詞의 사회문화적 의미 분석을 중심으로—」 『日本言語文化』 38 韓國日本言語文化學會 pp.103-130
- _____ (2017) 「コーパスを用いた語法研究の一例—「特徴」「特色」の比較—」 『日本言語文化』 41 韓國日本言語文化學會 pp.75-94
- _____ (2018) 「어법분석을 통한 유의어 기술의 예—「改善」과「改良」의 경우—」 『日本語教育』 84 韓國日本語教育學會 pp.17-31
- 고은숙(2016) 「한일사전의 색채형용사 의미 정보 구축에 관한 연구」 『日本研究』 72 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.313-333
- 공미희·손동주(2017) 「코퍼스를 이용한 『にくい』『づらい』『がたい』에 관한 의미 분석」 『日本語文学』 79 日本語文学會 pp.1-22
- 김계연(2018) 「한·일 십식동사 관용표현 대조고찰-십식동사의 의미역할을 중심으로-」 『日語日文學研究』 104(1) 韓國日語日文學會 pp.125-146
- 김선영(2018) 「일본 인터넷 신문 어휘 분석」 『日本語文学』 81 日本語文学會 pp.17-40
- 김성은(2017) 「기독교의 유일신 사상과 번역어 “神”」 『日本語文學』 74 韓國日本語文学會 pp.23-40
- 김시은(2017) 「한국인 일본어 상급학습자의 의견문 사용어휘 연구—모어화자와 품사비교를 중심으로—」 『日本語教育研究』 41 韓國日語教育學會 pp.23-39
- 김양선(2018) 「회화체에서의 일본어 이디엄(idiom) 특성—일본만화를 중심으로—」 『日本語學研究』 55 韓國日本語学会 pp.19-38
- 김영란(2018) 「한국인 일본어 학습자의 어감분석을 통한 일본어 오노마토펬의 특징」 『日本文化研究』 67 東アジア日本學會 pp.183-199
- 김용민(2017) 「한·일 초등학교 교과서 경제관련 개념의 사용빈도 분석」 『日本文化研究』 62 東アジア日本學會 pp.49-67
- 김유영(2017) 「일본 미디어의 동일본대지진 원자력발전소 사고관련 어휘선정 및 구사에 관한 연구—후쿠시마와 타국의 원자력발전소 사고기사의 보도태도에 대한 비교대조를 중심으로—」 『日本近代学研究』 55 韓國日本近代学会 pp.149-168
- 김하연(2018) 「일본어 의료어휘 연구」 『日本語文学』 81 日本語文学會 pp.61-80
- 민승희(2018) 「1인칭대명사 ‘나’, ‘わたし’, ‘I’에 관한 통시적 관점에서의 대조 분석」 『日語日文學研究』 105(1) 韓國日語日文學會 pp.83-102
- 박민영(2018) 「「そして」와「それから」의 의미분석—일본어학습자의 오용 방지를 목적으로—」 『日本研究』 77 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.245-268
- 박선주(2018) 「코퍼스를 이용한 일본어 어휘학습의 제안—「~的」가 붙는 어기의 요소를 중심으로—」 『日本語教育』 85 韓國日本語教育學會 pp.1-16
- 박종승(2017) 「코퍼스에 의한 일본어 이은말 연구」 『日本語文学』 77 日本語文学會 pp.81-104
- 박효경(2017) 「近代語「浪漫」の成立と変遷」 『日本言語文化』 41 韓國日本言語文化學會 pp.173-189
- 백이연(2018) 「기/氣 관련 관용구의 한일 대조연구」 『日語日文學研究』 106(1) 韓國日語日文學會 pp.83-99
- 손영석(2017) 「초·중급 일본어 학습자를 위한 멀티미디어 코퍼스의 교육적 활용방안 연구—일본어 자막 탑재를 중심으로—」 『日本語教育』 82 韓國日本語教育學會 pp.53-68
- _____ (2018) 「재일한국인 이중언어 사용자들의 「-スル」「-하다」 사용실태 연구—음성 코퍼스를 자료로—」 『日本學報』 115 韓國日本學會 pp.109-127

- _____(2018) 「한국어 자막과 멀티미디어 코퍼스를 활용한 일본어교육 방안」 『日本語教育』 83 韓國日本語教育学会 pp.15-31
- 송정식(2017) 「한·일 초등학교 국어교과서 접속사 사용양상 고찰」 『日本語教育研究』 38 韓國日語教育學會 pp.113~129
- 신민철(2017) 「韓國語와 日本語의 漢字語 比較研究—調査結果에 대한 考察—」 『日本近代学研究』 55 韓國日本近代学会 pp.101-116
- _____(2018) 「韓國語와 日本語의 一字 漢字語에 관한 考察」 『日本近代学研究』 59 韓國日本近代学会 pp.43-56
- 신은혜(2018) 「「さて」와「ところで」의 의미적 기능 차이에 대하여—BCCWJ와 CSI에 의한 분석 예」 『日本近代学研究』 59 韓國日本近代学会 pp.95-114
- 윤민이(2018) 「한·일 양국 신문 어휘의 젠더적 사용양상」 『日語日文學研究』 106(1) 韓國日語日文學會 pp.39~59
- 이덕배(2018) 「70·80대 한국인의 일본식 한자어 사용실태 및 인식」 『日本語教育』 83 韓國日本語教育学会 pp.61-72
- 이덕배·안동미(2017) 「50-60대 한국인의 일본식 한자어 사용실태 및 인식에 관한 고찰」 『日本語教育』 79 韓國日本語教育学会 pp.33-45
- 이영숙(2017) 「語義変化와 類義語의 고찰—中世 기리시탄 資料의 「懷かし」「恋し」「思ふ」를 중심으로—」 『日本学研究』 51 檀國大學校日本研究所 pp.333-352
- 이우제(2017) 「일본어 타격동사 「うつ」의 의미 확장에 관한 일고찰」 『日語日文學研究』 102(1) 韓國日語日文學會 pp.3~33
- 이윤정(2018) 「3차원 컴퓨터지원 설계프로그램의 어휘 분석 연구」 『日本文化學報』 77 韓國日本文化学会 pp.275-292
- _____(2018) 「기술전문사이트『HTML5 Experts.jp』의 어휘 분석 연구」 『日本語文学』 81 日本語文学学会 pp.139-166
- 이자호(2017) 「한·중·일의 근대 어휘교류에 관한 연구—삼페인의 표기와 개념—」 『日本語學研究』 52 韓國日本語学会 pp.53~64
- 이준서(2017) 「ride_vehicle」 프레임의 의미 확장에 관한 일고찰」 『日語日文學研究』 103(1) 韓國日語日文學會 pp.165~179
- 이충규(2018) 「「捨てる」と「버리다」との対照研究」 『日本近代学研究』 61 韓國日本近代学会 pp.29-48
- 장원재(2018) 「어휘등급에 의한 한일 차용어 분류에 대한 유효성 검토」 『日本語文学』 81 日本語文学学会 pp.167-184
- 전자연(2017) 「副詞「別に」の意味変化と主観化」 『日本言語文化』 39 韓國日本言語文化學會 pp.59~79
- 조은정·윤강구(2017) 「「でる」와 「나가다」의 의미에 대한 대조연구」 『日本語教育』 79 韓國日本語教育学会 pp.75-87
- 천호재(2018) 「연어(連語)에 기반한 엔카(演歌) 가사분석」 『日本語文学』 82 日本語文学学会 pp.273-298
- 최정희(2018) 「한국 대학생의 「간지나다」 사용 양상에 관한 사회언어학적 고찰」 『日本語教育』 83 韓國日本語教育学会 pp.73-90
- 한규안(2017) 「「など」「なんか」「なんて」의 비교 연구—통사적 기능 및 의미 비교를 중심으로—」 『比較日本學』 41 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.407~434
- 한증덕·김인현(2017) 「「ところ」の意味·用法について」 『日本語教育』 81 韓國日本語教育学会 pp.75-85
- 한택철(2017) 「한·일 동물속담 대조연구—여우를 소재로 한 속담을 중심으로」 『日本文化學報』 74 韓國日本文化

学会 pp.257-277

- 허황희(2017) 「日本の 라면名」 『日本近代学研究』 55 韓國日本近代学会 pp.85-100
- 현영미·이경규(2017) 「고전 중국어 오노마토피의 일본어 수용에 관한 연구—명치기 문헌에 나타난 접 어형태의 용례를 중심으로—」 『日本近代学研究』 77 國日本近代学会 pp.69-84
- 호규진(2017) 「왜어유해 어휘의 성격—접해신어 개수분과의 비교를 중심으로—」 『日本學報』 112 韓國日本學會 pp.87-106
- 홍민표(2018) 「형제자매 호칭에 대한 한일 대조연구」 『比較日本學』 42 漢陽大學校日本學國際比較研究所 pp.373-386
- 安善柱(2017) 「聞かれる」の意味・用法について—「言われる」との関わりをめぐって— 『日本研究』 27 高麗大學校グローバル日本研究院 pp.261-281
- 李左知子(2017) 「「重要」「大事」「大切」の語の特徴と心理的意味合いについて」 『日本語教育研究』 41 韓國日語教育學會 pp.171-188
- 石塚令子(2017) 「「車(クルマ)」の語誌」 『日本言語文化』 40 韓國日本言語文化學會 pp.7-25
- 李忠奎(2018) 「切斷動詞「切る」と「자르다」の対照研究」 『日語日文學』 77 大韓日語日文學會 pp.193-210
- 伊藤貴雄(2017) 「オタク川柳」に見る語彙表現と心 『日本研究』 27 高麗大學校グローバル日本研究院 pp.315-341
- _____ (2018) 「大阪弁川柳」に見る語彙表現と心象風景の一断面 『日本研究』 29 高麗大學校グローバル日本研究院 pp.5-40
- 李德培(2017) 「韓国語に残存する日本語の実態—60代以上の男女を中心に—」 『日本語文學』 72 韓國日本語文学會 pp.133-154
- 李東哲(2017) 「ことばの変化と用法に関する一考察—「知れる」の使われ方と意味を中心に—」 『日語日文學研究』 102(1) 韓國日語日文學會 pp.163-190
- 李惠正(2017) 「日本語授受表現における動詞コロケーションの意味類型について—大規模コーパスを用いて—」 『日本語教育』 81 韓國日本語教育学会 pp.59-74
- 李美淑(2018) 「한국과 일본의 중·고등학교 학교 급별 국어교과서 어휘 변화 연구」 『日本學報』 116 韓國日本學會 pp.65-84
- 林禔映(2017) 「副詞「所詮」の史的変遷」 『日語日文學研究』 101(1) 韓國日語日文學會 pp.47-66
- 大谷鉄平(2017) 「Edward Sapirの意味研究に関する一考察:「心理」「感覚」「文化」の連関性をを中心に」 『日本文化學報』 72 韓國日本文化学会 pp.65-86
- _____ (2017) 「流行語「萌え」の意味拡張と「理屈づけ」—雑誌記事タイトルの用例分析をもとに—」 『日本語文學』 75 韓國日本語文学會 pp.31-50
- _____ (2018) 「評価語彙の流通と「場」の影響」 『日本文化學報』 77 韓國日本文化学会 pp.251-273
- 吳秀文(2018) 「新聞3社の社説語彙の使用頻度-多用される名詞語彙の分類」 『日語日文學』 79 大韓日語日文學會 pp.69-86
- 小野里恵(2018) 「日韓の類語表現とその連語」 『日語日文學』 77 大韓日語日文學會 pp.163-179
- 金慶惠(2018) 「日本語と韓国語の動詞の対照研究—日本語教育の観点から「あける」「ひらく」と「열다」「피다」の意義素の抽出を目指して—」 『日本語教育研究』 44 韓國日語教育學會 pp.25-42
- 金光成(2018) 「量の副詞と共に起る日本語複合動詞の特性に関する考察」 『日語日文學』 78 大韓日語日文學會 pp.23-41
- _____ (2018) 「複合名詞の語形成に見られるメタファーと再分析」 『日本文化研究』 67 東アジア日本學會

- pp.163-182
- _____(2018) 「複合動詞「名詞＋づける」の語形成とその動機づけ—名詞部分が抽象的關係に属するケースを中心に—」『日本語教育』85 韓國日本語教育学会 pp.43-58
- 金祉諤(2017) 「韓國人日本語學習者の動詞の意味のプロトタイプの考察—「傳える」「投げる」「忘れる」の場合—」『日本語教育』79 韓國日本語教育学会 pp.1-17
- 金秀珍(2018) 「「たつ」の意味分析と意味拡張の様相」『日語日文學』78 大韓日語日文學會 pp.43-59
- 金到閭(2018) 「日・韓 両国語 動詞의 多義的인 語彙分析研究—遊ぶ와 놀다를 中心으로—」『日本文化學報』78 韓國日本文化学会 pp.379-396
- 金炫秀(2017) 「한국어 [보다]와 일본어 [見る]가 포함된 慣用句 의미형성의 양상 고찰」『日語日文學』76 大韓日語日文學會 pp.5-25
- 朴惠晟(2018) 「有対動詞「あく」「あける」の自他対応と非対応」『日本學研究』54 檀國大學校日本研究所 pp.461-482
- 金英兒(2017) 「日韓両国語の聴覚形容詞の研究—類義語における語彙教育の立場から—」『東北亜文化研究』52 東北アジア文化學會 pp.349-365
- 金廷珉(2018) 「ドラマタイトルの短縮語に関する韓日対照研究」『日本語學研究』56 韓國日本語学会 pp.3-17
- 權奇洙(2017) 「日本語における學習動詞の一考察—「習う」と「學ぶ」を中心として—」『東北亜文化研究』50 東北アジア文化學會 pp.241-256
- _____(2017) 「日本語における養育動詞の一考察—「育てる」と「養う」を中心として—」『東北亜文化研究』52 東北アジア文化學會 pp.367-380
- 齋藤倫明・石井正彦編(2011) 『これからの語彙論』ひつじ書房 pp.1-319
- 坂野慎治(2017) 「「悩む・苦しむ」に前接する格助詞の用例分析—名詞句と格助詞「ニ・デ・ヲ」との關係を中心に—」『比較日本學』39 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.379-396
- 澤田信恵(2018) 「日本語・韓國語のかたさの擬態語における多義性の考察」『東北亜文化研究』54 東北アジア文化學會 pp.19-34
- _____(2018) 「日本語と韓國語のやわらかさを表す擬態語における多義性」『東北亜文化研究』56 東北アジア文化學會 pp.129-144
- 申惠淑(2018) 「動物語彙を用いた日本語感情表現研究—韓國語表現との対照を含めて—」『日語日文學研究』104(1) 韓國日語日文學會 pp.55-81
- 関崎博紀(2017) 「日本人が抱く韓國の国、人、言葉に対するイメージ—日本の国、人、言葉に対するイメージとの比較を通して—」『日本語學研究』54 韓國日本語学会 pp.65-86
- 薛根洙(2017) 「移動動詞の研究—「連語と慣用句との關係」を中心に—」『日語日文學研究』100(1) 韓國日語日文學會 pp.253-269
- 宋正植(2018) 「韓・日小学校4年生国語教科書の語彙研究」『日本言語文化』43 韓國日本言語文化學會 pp.69-88
- 竹下知・佳崔建植(2018) 「ハラ～ホロ系反復形オノマトペの意味変化について(Ⅱ)—近世語～現代語における形態・意味用法の変化を中心に—」『東北亜文化研究』54 東北アジア文化學會 pp.161-177
- 崔鍾勳(2017) 「「準備」「用意」「支度」の意味特徴の重なりとずれについて—「준비」との対照を通して—」『日本語學研究』54 韓國日本語学会 pp.203-221
- 崔主利(2017) 「略語の様相—国語辞典を中心に—」『日語日文學研究』102-1 韓國日語日文學會 pp.79-95
- 張元哉(2017) 「語彙・意味研究の現状と展望」『日本語學研究』51 韓國日本語学会 pp.33-39
- 張味京(2018) 「1930년대 韓・日의 <歷史教科書> 비교 연구—<천황> 서술 내용을 중심으로」『日本文化學

- 報』76 韓國日本文化学会 pp.27-46
- 趙垺熙(2017) 「『捷解新語』に見られる「いく・ゆく・まいる」について」『比較日本學』39 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.397-414
- 中坂富美子(2017) 「程度副詞の類義語に関する韓日対照研究—「가장」「제일」と「最も」「一番」を中心に—」『日本語教育』81 韓國日本語教育学会 pp.45-58
- 長原成功(2017) 「「夜」と「밤(bam)」に關する一考察」『日本近代學研究』57 韓國日本近代学会 pp.7-20
- 朴善玉(2018) 「『平家物語』における混種語の語種構成と構成要素の考察」『日本文化研究』68 東アジア日本學會 pp.159-184
- 白鍾讚(2017) 「日本語の複合動詞「見-」の考察」『日語日文學研究』103-1 韓國日語日文學會 pp.143-163
- 白同善(2017) 「日本語における卑罵語の使用実態に関する研究」『日本文化研究』63 東アジア日本學會 pp.269-286
- 森本勝彦(2018) 「韓国語と日本語の四肢に關連する慣用句の対照研究」『日本文化研究』66 東アジア日本學會 pp.51-75
- 劉恩聖(2017) 「한·일 감정형용사의 대조연구-「기쁘다」와「うれし」를 중심으로-」『日語日文學研究』101(1) 韓國日語日文學會 pp.23-45
- _____(2018) 「한·일 척도형용사의 대조연구-「많다(多い)」와「깊다(深い)」를 중심으로-」『日本語教育研究』43 韓國日語教育學會 pp.187-207
- _____(2018) 「일본어 표현교육을 위한「재미있다」와「面白い」의 대조연구」『日語日文學研究』104(1) 韓國日語日文學會 pp.101-124
- 劉相溶(2018) 「語構成要素로서 1字漢語「氣(キ・ケ)」의 變遷—大藏流狂言 3種의 名詞用例를 中心으로」『日本學研究』55 檀國大學校日本研究所 pp.385-405
- Asano-Cavagh, Yuko(2017) 「NSM Approachによる類義語の意味分析—日韓の傳達表現を中心に—」『日本語學研究』54 韓國日本語学会 pp.87-106

— 〈 요 지 〉 —

어휘 연구의 현황과 전망

2017년-2018년 2년간 한국의 일본어학계에서 공표된 어휘연구에 관한 논문에 관하여 그 성과를 개관하였다. 어의, 어형(어구성, 어종, 위상), 어휘체계, 통시적 어휘연구, 사회문화적 어휘연구의 7개의 범주로 나누어 각 분야에 있어서의 연구동향을 정리하였다. 전체적으로 유의어를 중심으로 한 어휘체계의 연구가 활발하였고 어의와 어휘조사에 관한 연구도 늘었으나 어구성, 어종, 위상에 관한 연구는 전기(지난 2년간)에 비해 줄어들었다. 어지(語誌), 유의어나 오노매토피어의 의미변화에 관한 통시적 연구, 문화를 반영하는 어휘와 미디어를 경유하여 사회적 가치관을 형성하는 어휘의 모습에 관한 사회문화적 연구, 유의어의 구별법과 콜로케이션 추출법, 멀티미디어코퍼스의 일본어교육에의 응용 등의 코퍼스 어휘연구가 활황을 띤 것이 금기 2년간의 어휘연구의 특징이었다.

최근 활발해지고 있는 역사언어학적 어휘연구, 사회언어학적 어휘연구, 대조언어학적 어휘연구, 코퍼스 어휘연구뿐만 아니라 앞으로의 한국의 어휘연구에는 齋藤・石井(2011)에 정리되어 있는 바와 같이 어휘연구를 전문으로 하는 어휘론을 뛰어넘어 방언학, 문헌학, 민속학, 페미니즘, 정보학, 심리학 등 실로 다양한 학문을 횡단한 연구가 이루어지기를 기대한다.

논문분야 : 어휘론

키워드 : 어의, 어휘의 체계, 어휘조사, 사회문화적 어휘론, 코퍼스어휘론

■ 강경완(姜炘完)

대구가톨릭대학교 조교수

kwkang@cu.ac.kr

■ 投稿日 :	2019년	1월	5일
■ 審査開始 :	2019년	1월	14일
■ 審査完了 :	2019년	2월	8일
■ 掲載確定 :	2019년	2월	11일